

2019年1月号 簿記論 つぶ問

3問目

【問題】

次の各項目は、当期の退職給付引当金の増加、減少、影響しない、のいずれに該当するか答えなさい。なお、数理計算上の差異は発生年度の翌年度から費用処理を行う。

- ① 勤務費用
- ② 利息費用
- ③ 期待運用収益
- ④ 過年度に発生した未認識数理計算上の差異（割引率の低下によるもの）
- ⑤ 当期に発生した数理計算上の差異（長期期待運用収益率に対して実際の運用結果が良かったことによるもの）
- ⑥ 当期に退職金規程を変更してこれから退職する従業員の退職金を増加
- ⑦ 企業から年金資産を拠出
- ⑧ 年金資産から退職給付を支給
- ⑨ 企業から退職給付を支給

【解答】

- ① 増加
- ② 増加
- ③ 減少
- ④ 増加
- ⑤ 影響しない
- ⑥ 増加
- ⑦ 減少
- ⑧ 影響しない
- ⑨ 減少

【解説】

電卓を使用せずに解ける基本の確認の問題です。退職給付会計を理解していればすぐに解答できる問題ですが、試験会場で処理に必要な情報と不要な情報について自信をもってすぐに見分けられる必要があります。

①～③は退職給付費用の構成要素です。④の数理計算上の差異について、割引率が低下した場合は割引計算で求める退職給付債務が増加し、それ以降の費用処理額が増えます。本問は、当期の退職給付引当金がどうなるかを答える問題であるため、当期の費用処理を通じて退職給付引当金が増加することになります。また⑤は実績の年金資産が増えますが、数理計算上の差異は発生年度の翌年度から処理を行うため、当期に発生した差異は当期の退職給付引当金に影響しません。⑥の過去勤務費用は発生年度からの費用処理が必要であり、数理計算上の差異のように翌年度からの費用処理が認められないため、当期の退職給付引当金を増加させます。⑦～⑨は拠出や支給であり、退職給付債務と年金資産が同額だけ減少する⑧を除き、すべて減少となります。